

平成 30 年 6 月 28 日現在

機関番号：32629

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16848

研究課題名(和文)近代オスマン帝国における共助の論理と実践

研究課題名(英文)Discourse and Practice of Mutual Aid in the Late Ottoman Empire

研究代表者

佐々木 紳(Sasaki, Shin)

成蹊大学・文学部・准教授

研究者番号：50587938

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、19世紀のオスマン手国で生じた災害や戦乱などの危機に際して、民間主導のもとに展開された共助の論理と実践を、オスマン・トルコ語の新聞雑誌をはじめとする同時代史料に即して実証的に明らかにすることを目的とする。

本研究の成果として、19世紀後半のイスタンブルで発生した大火災に際しておこなわれた募金活動の態様を明らかにした日本語論文と、これをもとに英文査読論文を作成することで、本研究の趣旨と方向性を国内外に向けて広く発信することができた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to reveal discourses and practices of private-level mutual aid performed at crises (natural disasters, civil wars, etc.) within the 19th-century Ottoman Empire. For that purpose, I analyzed contemporary resources, especially newspapers published in Ottoman Turkish.

Through this research, I published a paper in Japanese, which revealed fundraising campaigns performed at a great fire breaking out at Istanbul in the second half of the 19th century. I also published the English version of this paper in the Journal of Ottoman Studies.

研究分野：オスマン帝国近代史

キーワード：オスマン帝国 近代 共助 慈善 福祉

1. 研究開始当初の背景

20世紀末以降のグローバル化の進展、ならびに新自由主義的価値観に基づく社会・経済再編のなかで、人びとの生活や生存を保障するシステムとしての福祉や慈善への関心は、ますます高まっている。この趨勢は、歴史学の研究動向にも少なからぬ影響を与えている。

たとえば、西洋史やヨーロッパ史の分野では、高田・中野[2012]をはじめとする諸研究によって研究史の整理や問題提起がなされ、金澤[2008]や長谷川[2014]などイギリス史を中心に高水準の実証的事例研究が進んでいる。とくに高田らは、福祉を「自助・共助・公助」の複合的構成体と捉える「福祉の複合体」論を提唱し、当該テーマを有機的・立体的に理解するための展望を示した。他方、日本史研究では、たとえば倉地[2008]が当該テーマを日本通史の叙述の主軸にする試みをおこなうなど、新しい通史叙述を構想するための大きな可能性を開いた。

本研究代表者の専門分野であるアジア史・アフリカ史、わけても20世紀初頭に終焉を迎えるまでのおよそ600年にわたり中東・北アフリカ・バルカン地域の主要部分を勢力下におさめたオスマン帝国に関する歴史研究においても、この10年ほどで福祉や慈善に関する本格的な研究が散見されるようになった。とはいえ、その数は他地域に比してなお少なく、また以下にみるとおり、課題設定や扱う史料の面で検討すべき問題をいくつも抱えている。

これまで、中東を中心とするイスラーム地域の歴史研究、とりわけ18世紀以前の前近代史研究において慈善や福祉を取り上げる場合には、イスラームの宗教寄進システムたる「ワクフ」がもっぱら研究の対象とされてきた。しかし、たとえば長年にわたりワクフ研究を牽引してきたエイミー・シンガーも指摘するとおり、中東イスラーム地域における慈善や福祉の動機づけを無批判に「イスラーム」に還元するオリエンタリズムのアプローチは相対化されてしかるべきであろう[Singer 2008]。研究対象をワクフに限定することなく、当該地域の慈善や福祉の多様なあり方に目を向ける必要がある。

オスマン帝国近代史研究にあつては、たとえばボアズイチ大学(イスタンブル)のナーディル・オズベキが、「社会国家」をキーワードにして当該分野で立て続けに成果をあげてきた[Özbek 2002; 2006]。日本では、秋葉淳が比較教育社会史の視点を交えながら、オスマン近代の福祉や慈善をめぐる研究の方向性について紹介と提言をおこなっている[秋葉 2013]。しかし、これらの研究の関心は、総じて「近代国家」「社会国家」「福祉国家」としてのオスマン帝国像の追求にある。これは、これらの研究が依拠する主たる一次史料が、国家運営の記録の所産たる行政文書であることに起因すると考えられる。

「福祉の複合体」論の視点からみた場合、これまでのオスマン近代の福祉や慈善をめぐる研究は、その「公助」の側面を解明することに集中してきたといえよう。

研究代表者はこれまで、19世紀後半のオスマン帝国で生じた政治運動や政治思想について、新聞雑誌などの定期刊行物に基づく歴史研究を続けてきたが、佐々木[2010]で民間新聞による募金活動と政治運動とのかわりを論じて以来、当該テーマに継続的に注意を払ってきた[佐々木 2014a; 2014b]。つまり、「福祉の複合体」論のなかでは「共助」の位相に位置する言説や実践に注目してきたことになる。本研究は、以上に述べた研究動向のなかで生まれた問題関心をさらに深め、対象と時代を広げて具体的・本格的に考察しようとするものである。

2. 研究の目的

本研究は、19世紀のオスマン帝国で生じた災害や戦乱などの危機に際して、民間主導のもとに展開された共助の論理と実践を、同時代史料に即して実証的に明らかにすることを目的とする。

具体的には、当時のオスマン帝国で発行されていたオスマン・トルコ語(オスマン帝国期およびトルコ共和国初期に使用されていたアラビア文字表記のトルコ語)の新聞雑誌が、種々の危機に際して起ち上げた募金活動に注目して、オスマン近代における共助の位相を明らかにする。同時に、共助をめぐる言説のせめぎ合いの場となり、かつ共助の実践の担い手となった新聞雑誌の、歴史資料としての特異な位置にも留意することで、史料論の観点からも特色ある研究たることをめざす。

こうして、既存のオスマン帝国史研究のなかで明らかにされてきた国家主導の公助に對置しうる、オスマン社会の共助の論理と実践のあり方を、具体的かつ実証的に解明することが、本研究の最大の目的となる。

3. 研究の方法

本研究は、19世紀後半のオスマン帝国における共助の論理と実践のあり方を、当時オスマン・トルコ語で発行されていた新聞雑誌における報道や論説の分析を通して明らかにすることをめざす。実証的な外国史研究である。したがって、本研究の主たる作業は、トルコ共和国をはじめとする諸外国の図書館や研究施設に所蔵されたオスマン・トルコ語の定期刊行物の調査、収集、分析となる。

このため本研究では、トルコ共和国イスタンブルに所在するベヤズト国立図書館(Beyazıt Devlet Kütüphanesi)、アタテュルク文庫(Atatürk Kitaplığı)、トルコ宗教財団イスラーム研究センター(Türkiye Diyanet Vakfı İslâm Araştırmaları Merkezi)などで史料の調査と収集をおこなうべく、数回程度の海外出張をおこなう。

なお近年、トルコ国内では所蔵資料のデジタル画像を有料・無料で公開する機関が増えており(たとえば、ベヤズト国立図書館、アタテュルク文庫、アンカラの国立図書館 Milli Kütüphane など) 本研究でもこれを積極的に活用することで、史資料の調査・収集作業を効率化する。

研究期間中は、主たる海外出張予定地のトルコ共和国で治安や政情が悪化したこと、また、研究代表者の人事異動等の事情が重なり、初年度、第二年度に予定していた海外出張を取りやめた。その代わりに、Web 上で入手できる史資料の収集と分析を進める一方、英文査読論文の執筆と校閲に作業・経費を集中させた。第三年度にはトルコ共和国イスタンブルを中心に2週間程度の海外出張をおこない、現地の図書館や研究機関でしか入手できない新聞雑誌や研究文献の調査・収集・分析に努めた。

4. 研究成果

本研究のおもな研究成果として、19世紀後半のイスタンブルで発生した大規模な火災に際しておこなわれた募金活動を取り上げ、新聞紙上で展開された「救済」をめぐる議論を分析した佐々木 [2015] がある。これは、1865年にオスマン帝国の帝都イスタンブルの旧市街で生じた「ホジャパシャ大火」をめぐる復興事業と募金活動との関係を、『日報時事通信』(ルーズナーメイ・ジェリーデイ・ハヴァーディス)や『公論述報』(タスヴィーリ・エフキヤール)といったオスマン・トルコ語の民間新聞の報道や論説をもとにして分析し、「公助」と「共助」との複層的な関係のなかで救済活動が展開していく過程を明らかにした論文である。国内外の既存の研究では注目されることのなかった募金活動の態様を明らかにした点のみならず、日本史・西洋史を含む国内の学界に向けて本研究の趣旨と意義を広く紹介する機会となった点で、本研究の成果発信の面で重要な業績である。本論文ならびに本研究の方向性は、たとえば鈴木 [2015] や成地 [2017] などにも共有され、若手研究者を中心に当該テーマの研究進展を促す契機を提供できたと考える。

他方、佐々木 [2015] をもとにして本研究のエッセンスをまとめた Sasaki [2018] は、トルコ共和国の英文学術誌(査読有)に掲載され、本研究における実証的な事例研究の成果のみならず、その趣旨と意義をも広く国外に発信することができた。とくに、トルコやドイツなど海外の研究者から、本研究の研究対象の一つである災害募金とジャーナリズムとの関係について、また本研究の概要と展望について、個別に問い合わせがあった。これは、当該テーマへの関心ならびに本研究の方向性に対する期待が、内外でますます高まっていることを示している。

なお、本研究期間中に成果公表を予定し

ていた、1870年代のアナトリア飢饉をめぐる救済活動や、オスマン領バルカンにおける募金活動については、トルコ共和国で生じた政情不安等の理由で現地調査を十分に遂行することができなかった。これについては、今後も継続的に関心を向け、機会を改めて成果を取りまとめ、報告することとしたい。

<引用文献>

高田実、中野智世編、福祉、近代ヨーロッパの探究 15、ミネルヴァ書房、2012年

金澤周作、チャリティとイギリス近代、京都大学学術出版会、2008年

長谷川貴彦、イギリス福祉国家の歴史的源流：近世・近代転換期の中間団体、東京大学出版会、2014年

倉地克直、徳川社会のゆらぎ、全集日本の歴史 11、小学館、2008年

Amy SINGER, *Charity in Islamic Societies*, Cambridge, 2008

Nadir ÖZBEK, *Osmanlı İmparatorluğu'nda Sosyal Devlet: Siyaset, İktidar ve Meşruiyet (1876-1914)*, İstanbul, 2002 [ナーディル・オズベキ、オスマン帝国における社会国家：政策、権力、正統性(1876-1914年)]

Nadir ÖZBEK, *Cumhuriyet Türkiyesi'n-de Sosyal Güvenlik ve Sosyal Politikalar*, İstanbul, 2006 [ナーディル・オズベキ、共和国トルコにおける社会保障と社会政策]

秋葉淳、オスマン帝国における近代国家の形成と教育・福祉・慈善、広田照幸、橋本伸也、岩下誠編、福祉国家と教育：比較教育社会史の新たな展開に向けて、昭和堂、2013年、141-157頁

佐々木紳、新オスマン人運動の形成とクレタ問題：『報道者 *Muhbir*』紙の募金活動を中心として、アジア・アフリカ言語文化研究(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所) 第79号、2010年、73-93頁

佐々木紳、オスマン憲政への道、東京大学出版会、2014年 a

佐々木紳、ジャーナリズムの登場と読者層の形成：オスマン近代の経験から、秋葉淳、橋本伸也編、近代・イスラームの教育社会史：オスマン帝国からの展望、昭和堂、2014年 b、113-137頁

佐々木紳、近代オスマン帝国における救済

の複合性：募金活動の現場から、歴史学研究(歴史学研究会)993号、2015年、13-22、77頁

鈴木真吾、19世紀末イズミルにおける都市行政と公衆衛生、日本中東学会年報(日本中東学会)31-1号、2015年、1-27頁

成地草太、クリミア戦争後のオスマン帝国における二つの難民支援運動：1860年から1865年の官報・新聞における義捐金品リストの分析から、駿台史学(駿台史学会)161号、2017年、23-62頁

Shin SASAKI, Mixed Dynamism of Relief in the Late Ottoman Empire: The Historical Actualities of Fundraising Campaigns, Osmanlı Araştırmaları / The Journal of Ottoman Studies (İSAM / İstanbul 29 Mayıs Üniversitesi), No. 51, 2018, pp. 165-186

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

Shin SASAKI, Mixed Dynamism of Relief in the Late Ottoman Empire: The Historical Actualities of Fundraising Campaigns, Osmanlı Araştırmaları / The Journal of Ottoman Studies (İSAM / İstanbul 29 Mayıs Üniversitesi), No. 51, 2018, pp. 165-186, 査読有

佐々木紳、トルコ近現代史のなかの立憲主義：歴史の復元ポイントとして、歴史学研究(歴史学研究会)962号、2017年、24-32頁、査読無

佐々木紳、近代オスマン帝国における救済の複合性：募金活動の現場から、歴史学研究(歴史学研究会)993号、2015年、13-22、77頁、査読無

〔学会発表〕(計2件)

佐々木紳、世界大戦のトラウマ：トルコの国民統合とセーヴル・シンドローム、メトロポリタン史学会第14回大会シンポジウム(メトロポリタン史学会)2018年

佐々木紳、トルコ近現代史のなかの立憲主義：歴史の復元ポイントとして、歴史学研究会総合部会2017年例会(歴史学研究会)2017年

〔図書〕(計2件)

成蹊大学文学部学会編、風間書房、嗜好品の謎、嗜好品の魅力：高校生からの歴史学・日本語学・社会学入門、2018年、248頁(11-31頁)

成蹊大学文学部学会編、風間書房、人文学の沃野、2017年、288頁(69-98頁)

6. 研究組織

研究代表者

佐々木 紳(SASAKI, Shin)

成蹊大学・文学部・准教授

研究者番号：50587938